

2017 年春巡検「札幌の失われた川を歩く」の紹介

宮坂省吾（川の案内人）・内山幸二（石の案内人）・土屋 篁（「ビルの岩石学」）・
横山 光・米島真由子（巡検係）

1. 2,000 年にわたる母なる川

サッポロ川・コトニ川・ヨコシペツ川などと呼ばれていた豊平川の祖先河川の岸边は、2千年ほど前から続縄文～擦文～アイヌ文化の長い時代、人々が住み続けた北の郷であった。サケの産卵床のほとりに住居を構えたアイヌの人たちは、カムイチェプ（神の魚：サケ）を捕獲して食卓を飾っていた。

小川の砂礫は、かれらがMEMと呼んだ湧泉池からの大量の湧水によって洗われ、サケに産卵床を提供した。この泉は扇状地の末端で豊平川からの地下水（伏流水）が湧きだしたもので、10℃に満たない冷たい水が北の魚たちの孵化を助けた。

豊平川の祖先河川は、先住の人たちだけではなく、サケなどにとっても「母なる川」だった。

2. 札幌は「水の都」

開拓使が置かれた1869（明治2）年ころ、扇状地の町「札幌」には小川がそこらじゅうに流れ、滔々と泉が湧きだし、ハルニレやカシワがつくった森の木蔭にはエゾサンザシが白い花を付けていた。開拓使は、今は北海道大学の構内及び植物園となっているところを、育種場や札幌農学校の農園とした。

この風光明媚を生かして、1871（明治4）年、道庁の裏・育種場の東南端に「偕（とも）に楽しむ公園」偕楽園が作られた。また、本府建設への川の利用は、創成川を舟運の運河、古い川筋を街中の用水路、水力を動力とする木材加工や製粉などの工業に用いるなど、多岐にわたっていた。

札幌は、自然の川や樹が残され、都市づくりに利用される「水の都」となった。

3. 「水の都」の崩壊

開拓使時代の都市建設や農地開拓、橋梁や堤防の建設が進むとともに、川や樹は瞬く間に姿を消した。その一つはサッポロ川の変貌、もう一つは山鼻や市内を流れていたコトニ川上流の消失であった。そして、植物園のMEMは大正時代のはじめ、偕楽園のMEMは昭和26年頃に涸れていった。

4. 巡検の趣旨

★ 「水の都」札幌を尋ねる

半世紀前、山田秀三氏は、失われた自然をアイヌ語地名の解読によって解明しようとした。彼は、北海道の記録は残っているのはそう古くないが、短い沿革でも興味深い独特な香りがあると評価し、断片でも大切に積み上げていくと、格調の高いしっとりとした北の都が仕上がる、と述べた。

今回の巡検は断片の一つ「地形の成り立ち」を尋ね、主に開拓使時代の記録によって「失われた川」サクシコトニ川やチェペンペツ川、シンノシケコトニ川の一端を覗いて見る。

★ 開拓使時代からの石材を鑑定する

開拓使以来の建築や碑に、札幌近郊や北海道の石材が使われてきた。山の手博物館は「ビルの岩石学」をまとめ、市民対象のツアーを行ってきた。今回の巡検では、コース内の石材や碑の岩石学を紹介する。それだけではなく、150年の時間の経過の中で、清掃や修復を受けて石材が変わっていく様子も紹介する。